慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	丸山真男著 日本の思想
Sub Title	
Author	石坂, 巌
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1962
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.55, No.3 (1962. 3) ,p.316(108)- 317(109)
JaLC DOI	10.14991/001.19620301-0108
Abstract	
Notes	社会思想史研究特集 新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19620301-0108

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新渡戸のような寛容と思想の柔軟さ、自由さと、忍耐が必要なのだとも考えさせられる」とされている。

筆者は右の諸論文につき、又各論文の相互関連につき論ずべき点を多くもっているが、ここはその場所ではないから別の機会を待ちたい。見られる様に、思想史研究の上に実に豊かな問題提起をしているので、あえて紹介の筆をとった次第である。（創文社刊・A5・三二二頁・六五〇円）　—中村　勝己—

＊　＊　＊

丸山真男著

『日本の思想』

この書物については、すでに多くの新聞、雑誌においてとりあげられている。それ故、内容の紹介は、いまさら必要ないであろう。ここではむしろ、丸山教授により提出された問題の基本点と、それが今日の日本の産業経営社会につながる問題点をのべ、最後にこの書に収められた理論のうち、われわれに身近かな問題性をもつものを指摘しておこう。

(1)　問題の基本線。いろいろな思想の雑居性——これが日本の思想の特徴である。この把握が教授の問題の出発点である。われわれの考え方を分解してみると、「仏教的なもの、儒教的なもの、シャーマニズム的なもの、西欧的なもの——要するに私たちの歴史にその足跡を印したあらゆる思想の断片に行き当る。」つまり、千年以前の昔から現代までの世界の思想的産物が日本の思想史のなかにストックされている事実、しかもそれらの各思想を全体として位置づけるような、そういう意味での原理的な思想が形成されなかった伝統。このような日本の思想的伝統に対する認識と反省から、日本の思想史的構造を出来るかぎり明晰に分析し、それを通じて、われわれの精神的成長を育くんだ思想的伝統から脱出すべき足場と契機をさぐり出そうとした、思索的苦闘の成果が本書なのである。

その意味で、ここには、丸山教授自身の内的思想の歩みとその際きざまれた問題点が、日本思想の史的構造の考察、分析と見事に融合しているのである。したがって、われわれは第一にこの書中に投影された教授自身の思想的運動の軌跡を追求すると共に、そのさし示す方向をさぐらねばならない。第二に、ここに理論化された日本思想の構造的関連のなかから、自分たち自身の問題をくみとり、それぞれの思想的軌道の確立が要求されるのである。

そのような角度から、つぎに三つの問題をあげようと思う。

(2)　「タコ壺文化」と「ササラ文化」の問題。丸山教授は、社会の基底に伝統的な共通のカルチュアーのある社会を「ササラ文化」とよび、最初から専門的に分化した知識集団イデオロギー集団が閉鎖的なタコ壺をなして、それぞれの内部でのみ仲間言葉をしゃべり、そこに共通の広場が形成されない社会を「タコ壺文化」として比喩的に表現し、日本の社会をタコ壺文化としてあざやかに規定された。さてわが国においては、タコ壺集団形成は知識集団、イデオロギー集団にのみ行われているのでない。日本の企業もまたタコ壺経営組織をもち、それに対応して労働組合もまたタコ壺組織をもっている。労使双方とも組織の近代化にあたり、厚いタコ壺の壁にぶつかっていることは、あまりに周知であろう。終身雇傭制、年功序列体系、閉鎖的労働市場そして企業別組合である。総評や全労の呼号にもかかわらず、日本の労働者は企業内に閉じこもって、労働者階級として企業を越えた横の組織に広がるべき、共通の社会的基盤も、共通の考え方も、もち得ないのである。日本の社会主義政党の弱さはこの点にある。一方、日本の経営者たちは、自己経営内部の従業員を、学歴別、性別、世代別、地域別などのこまかいタコ壺群の中に押しこめ、さらに他の経営体に対しては、自身が一つの大きなタコ壺組織体をなして、生産性の原動力としての機能的原理の発動にブレーキをかけ、自ら悩んでいるのである。

(3)　「する」価値と「である」価値。右にのべた機能的原理こそ業績本位を本体とする近代的原理であり、制度を身分化し固定化し、その存続維持を第一とする前近代的原理と明白な対極を形成する。この相対立する原理を教授は、「する」価値または「する」論理と、「である」価値または「である」論理として対置させた。機能的原理としての「する」価値が、資本主義的近代経済社会に典型的に打ち出されたことは、説明の必要ないことである。そして丸山教授が「する」価値の近代日本の先駆的代表として福沢先生をあげる時、まさにその点にこそ、近代日本資本主義の形成と慶応義塾との深いつながりが結ばれたのである。慶応義塾の日本近代史上における大きな位置は、右の「する」価値の主要な拠点たるところにあったのである。今日、われわれはこの伝統、つまり、「する」価値原理をよく保持させているであろうか。権利の上に眠る者に法的保護が与えられないと同じように、伝統の上にあぐらをかく者にはよく伝統を生かすことは出来ないであろう。伝統を革新することにより、かえって伝統に永続性ある生命力を吹きこむことこそ、われわれの課題であるが、その革新的主体は、われわれ自身により、自身のうちにうみ出されねばならない。丸山教授の「日本の思想」は少くとも、このことを教えると共に、そのための自己省察に強力な手がかりを与えないではおかないのである。（岩波新書・一九二頁・一〇〇円）　—石坂　巌—

＊　＊　＊

田村秀夫著

『イギリス革命思想史』

——ピューリタン革命期の社会思想——

本書の著者の問題意識は第一に一六四〇年から六〇年に到る英国の市民革命の把握の仕方にある。すなわち著者は一方で英国において伝統的であったピューリタン革命というとらえ方に対しては、クリストファー・ヒル以来の市民革命としてのとらえ方の積極性を承認するのである。しかし同時に著者は、後者の市民革命的とらえ方を一面的に主張することは英国革命が宗教的観念や利害の対立を強く表わしていたことを無視もしくは軽視する危険があると考えるのである。従って英国革命をイギリスの市民革命とピューリタン革命という二重の側面でとらえることが、革命の全体像の正しい把握になるというわけである。

さて著者の問題意識の第二は以上のような英国革命の把握の上で当時の社会変革活動とその行動を支えた思想を生き生きとした対応関係の中で描きだそうということにある。しかもこの場合著者が注目するのは、市民革命の課題である資本主義的生産力の推進に積極的に役割を果した人々の思想と行動よりも、むしろ革命の基本線から脱落しながらも、革命的エネルギーの供給源となった手工業者や農民の民衆グループの思想と行動なのである。何故ならこれらの諸思想は資本主義の発展に対決する近代社会思想の諸類型の原型を示しているし、またこれらの思想と行動の分析によって始めて英国革命の全体像も十分な